

な

ご

み

っ

う

し

ん

発行日：平成 29 年 10 月 23 日（第 34 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

2011 年（平成 23 年）4 月 1 日に、島田療育センターはちおうじは歩みを始めました。それは、東日本大震災の年でした。1 年後、あくりるたわしの活動を手伝うことができ、相馬と私の物語が始まりました。そんな物語を紹介します（2）。  
所長 小沢 浩

## （2）「お互い様」の輪

板東あけみさんの声かけで、あくりるたわしの取り組みに関心を持った 9 人が平成 24 年 4 月 29～30 日に相馬を訪問した。

相馬の現状を見てもらいながらたわしの編み手さんと直接交流してもらうことで一人でも多くの方とふれあい「お互い様」の輪を広げようということで、相馬の地に集合した。

ほとんどの人が初対面であったが、あくりるたわしがつなげてくれていたので打ち解けるのに時間はかからなかった。

29 日は、南相馬を見学した。一同は、その姿に言葉を失った。放置されへしゃげて赤茶けた車。海水が残ったままの干拓地。点在するがれきの山。斜めになった電柱。崩れたままの家屋。かすかに枝が残っている杉。枯れた大地。1 年という月日がたっていたが、時間は止まったままであった。小幡さんが自宅を案内してくれた。何もない大地にポツンと建つ 3 階建ての家。2 階までの壁はぼろぼろであっ

た。まわりは住宅地ですべて家が建っていたとのこと。津波がすべてを流し去った。

でもそんな風景の中、心と目を向けると、満開の桜がところどころにみられた。枯れた大地にもポツンとタンポポが咲いていた。

30 日に編み手さんたちと仮設住宅で初めての交流会を行った。

編み手さん達は震災前に漁港で船迎えのお仕事をしていた時は知り合っていたのに、仮設住宅に入ってから連絡がとれなかったという仲間が多く、何よりも編み手さんどうしが再会を喜び合っていたことにまず驚いた。目の前で「あくりるたわし」を編んでいたが、その手つきはとても素早い。みんながいつも編んでいることが伝わってきた。喜びが伝わってきた。

編み手さんが、一人一人想いを語ってくれた。

「津波来るって聞いたが、みんな高台の家に逃げたんだあ。でもほごまで

津波きて、隣に逃げだ人はみんな流されちゃった。私も首のところまでヘドロにつかって、もう助かんねえな～、死んじまうな～って思ったんだ。でも、ヘドロ止まって必死にもがいたら何とか出ることできたんだ。でも、肩いでえなあ～って思って、病院行ったら骨折してたんだ。3カ月たってやっと治ったと思ったら、今度は乳がんだ。それも治ったと思ったら、今度は眼が見えねぐなって…、ヘドロで眼やられちゃって…、白内障だ。本当に次がら次で、な～んもいいことねえなあ～。こんなだったらあんどぎに死んでた方がなんぼか楽だったかしんね～なあ。とってたときに、あくりるたわしに出会ったんだあ。これ編んでるとなんか落ち着くんだよねえ。ありがとうね。」

「うちの子は自閉症です。家流されて、仮設住宅に入らなければならなくなっただけで、子どもが不安になって声を出すと、まわりに迷惑じゃないかとビクビクしていたんだあ。でも、あくりるたわし編んでいると気持ちがほっとして…。そうしたら子どもも落ち着いてきたんだあ。」

編み手さん一人一人がそれぞれの想いを語ってくれた。

それから、サポートメンバーの自己紹介があった。

私の順番がまわってきた。

「私は震災で何ができるかずっと考えていました。寄付はしました。でもお金だけでいいんだろうか。ボランティアさんが被災地で頑張っている姿をみて、『自分も手伝いたいなあ。でも、今診ている子どもたちに迷惑をか

けてはいけないし。仕事に穴をあけることはできない。』そうこうするうちに1年が経ってしまいました。その間ずっと心の中はもやもやしていました。そんなときです。板東さんが声を掛けてくれたのは。板東さんは、『雇用を創ることが本当の支援です。これは発展途上国の支援と同じです。』そう私に教えてくれました。これなら私にもできるかもしれない。そう思って相馬にきました。相馬を見学させてもらってその風景に愕然としました。1年たっても何も手つかずのままの相馬。でも、その中で満開に咲き誇っている桜は本当にきれいでした。相馬の桜は、私にとって今年3度目の桜です。1度目は東京の桜、2度目は富士山の火葬場でみた母の桜、そして3度目がこの相馬の桜です。桜はきれいです。私は2週間前に母を亡くしました。私は編み手の皆さんが母に重なるんです。だからあくりるたわしに感謝しています。相馬に母ができました。だからあくりるたわしを通じてこの思いを届けたいと思います。」

(奇跡がくれた宝物 小沢浩著

クリエイツかもがわ より)

